



落葉

第八号 平成29年11月30日

「落葉」(おちば)

◆原作ストーリー

「若菜」・「柏木」・「横笛」・「夕霧」の巻を典拠とする「落葉」柏木は、女二の宮(落葉の宮)を正室としながら、妹宮の女三の宮に憧れをもっていた。ある春の日、六条院で蹴鞠をしていた柏木は、寝殿の御簾の端から走り出した猫につけてあった綱で御簾が巻き上がり、その隙間から女三の宮の姿を垣間見て「いひ知らずあてにらうたげ」(なんとも言いようもなく上品でかわいらしい)と恋のとりこになります。ある夕べ柏木は、琴の音をききながら、もろかづら落葉をなににひろひけむ名は睦ましきかざしなれども葵祭にかざしにする二葉葵は、名は睦まじい二葉の姉妹ともいえるのに、なぜまあ私は落葉の方を拾ってしまったのか(馬場あき子訳)この歌がもとで女二の宮は「落葉の宮」と呼ばれるようになります。それほどまでに女三の宮を想う柏木は、とうとう侍従の手引きで密通し、女三の宮は懐妊します。(この子供が“薫”です)それを知った源氏は怒りにかられ、激しい感情を浴びせられた柏木は病に伏し、ついに再起できなくなってしまいます。柏木は、落葉の宮の庇護を親友である夕霧に託します。夕霧は落葉の宮を世話するうちに恋心が芽生えてきますが、落葉の宮の厳しい自制心から心は燃えず、夕霧のねばり強い愛を拒否します。その心の中には、亡き夫が女三の宮に比べて自分がつねに劣っていると思っていたことが、たいそう恥ずかしい思いをさせていたのでしょう。

◆宗家の語る見どころ

「落葉」は金剛流にだけ残る演目です。旅の僧が山城國小野の里に着き、手習の君(浮舟)の成仏得脱を祈っていると、いわくありげな女が手習の君のみ回向するのかがめ「落葉の宮はわれなり」といい残して消えてゆきます。僧は『源氏物語』の知識があるので、落葉の宮のことを回想していると落葉の宮が現れ、夕霧との思い出を語り、その罪を払って成仏させてほしいと願います。この後、落葉の宮の深い心のうちをあらわした序の舞が舞われます。横笛のしらねはいとど変はらねど空しくなりし音こそ尽きせね、音こそ尽きせね、音こそ尽きせね横笛(※)の音色は昔と少しも変わらないのに、空しくなった人をしのぶ、しのび音は尽きぬことです。(馬場あき子訳)最後には弔いを受けて、落葉がほろほろはらはらと山風にさらわれていくように消え去っていきます。まるで落葉とだぶるような、もののはかなさを感じさせる終わり方です。「落葉」は一曲をとおして物寂しさを感じさせるさびしいお能です。他にも「野宮」のように寂しいものはありますが、これほどさびしいお能はありません。そしてお能には裏を読んでいるような曲と素直に表だけを描いている曲とがあります。嫉妬や執念が描かれた曲は面白いかもしれませんが、「落葉」のように心の奥に潜むどうしてよいかわからない思いを抱き続けたひたむきな女二の宮の心が描かれたお能には、華やぎこそありませんが、実に美しいものといえます。

※横 笛…柏木の一周忌が執り行われた後の秋、夕霧は落葉の宮とその母、一条御息所を見舞います。亡き柏木の思い出を話し、琴や琵琶、歌を詠み交わして過ごした帰り際、夕霧は一条御息所から柏木遺愛の横笛を贈られます。その夜、夕霧は柏木の夢を見、横笛を伝えるのは夕霧でなく別の人であると伝えて消えていきます。

